二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

怪盗王女 Charlotte シャーロッテ

淫縛の円舞曲

小説 神崎美宙

挿絵 紫カジマ

序章 006
第一章 闇を駆ける王女 017
第二章 囚われた怪盗少女 047
第三章 処女を狂わす肛辱 091
第四章 公開輪姦 139
第五章 淫縛の円舞曲 189
終章 248

登場人物紹介

Characters

シャーロッテ＝マグルゲーテ

マグルゲーテ王家の第三王女。弱きを助け強きをくじく、正義の怪盗「黒猫」として活躍する。

フレイア

マグルゲーテ王国軍大佐を務める女性。軍内でも噂の若手のホープ。

ジャミン＝ジェイクス

マグルゲーテ王国大臣。最大派閥の長だが、下品な中年男。

『第二章　囚われた怪盗王女』より

「きゃぁあぁぁぁっ⁉」

ドアから水が飛び出してきた。起こったことを表現するには、そう例えることしか考えつかなかった。冷たくドロリとした水色の液体のようなものが四肢に絡みつく。

「な、何ですのこれは⁉」

パニックになる怪盗少女は必死に手足をバタつかせて振り払おうとするが、異物は身体の上を這いずり回りレオタードを汚していく。液体というよりも、もっと粘度が高くて、まるで生き物のように動き回っている。

「うっ！　これはスライム……」

ブーツに絡みついたドロドロとした物体が地面と張りつき、左足がズンと重たくなった。手足にまとわりつく粘液のせいで、だんだんと身体の自由が利かなくなり始める。

強力な粘着力を発揮するこのスライムは低級ではあるが立派な魔法だ。こんなことをできる人間がこの屋敷にいるなど、まったくの予想外だった。

「もうっ……うっとうしいですわねッ！」

ヌルヌルと不気味な肌触りのスライムは、レオタードの上を伝い手から腕へ足から脚へと絡みつく範囲を広げ始めたのだ。シャーロッテはそれでも何とか屋敷の外に逃げようとするが、身体が思うように動かない。

「ひゃあっ……こ、この変態生物っ！」

それに腋やヘソなど敏感な部分を生温かい粘体に触れられると、ゾクっと背筋が震えて思わぬ悲鳴を上げてしまった。

「いたぞっ！　裏口の方だ!!」

スライムに足止めを食らっている間に、追っ手の兵士達が追いついてきた。逃げきったと思っていたのに、再び窮地に追い込まれてしまう。

（ダメですわ……ドンドン身体に絡み付いてっ）

ナメクジのように這いずり回る粘物のせいで、水分を吸ってレオタードの生地が縮み始めたのだ。ただでさえピッタリと張りついていた布地がさらに身体にキツく張りつき、身体の細かな凹凸まで露にする。元々ボリュウムたっぷりの乳房や尻部は女性独特の曲線を淫猥に浮かび上がらせ、鎖骨の窪みや腰骨の出っ張りまでレオタードの上から見て取れる。

「囲め囲めっ！　絶対に逃がすな!!」

ある意味、裸よりも恥ずかしい格好に気を取られている間に、周りはあっと言う間に兵士だらけになっていた。まだフレイアが来ていないのがせめてもの救いだ。

（万事休すですわね……）

身体中に鉛をぶら下げているようで歩くのが精一杯、悔しそうに眉を吊り上げることしかできなかった。それでも兵士達は黒猫の底力を警戒しているのか、すぐに襲い掛かってはこない。

「縄だ！　縄で捕まえろッ！」
ほとんど動けなくなっているシャーロッテに向かって兵士達は次々と縄を投げ始め、まるで暴れ馬を押さえつけるかのような扱いだ。縄の先に金属はついていないが、結びを作って重りにし怪盗少女を傷つけないようにしている。
「くっ！　はぁン……捕まる、わけにはいきませんのにッ……」
両手両足首に縄が巻きつき、少女の動きをさらに封じ込めようとしてくる。最後の力を振り絞って腕を振り回し縄を引いて抵抗をするが、ヌルヌルとしたスライムのせいで思うように力が出ない。乳房や股間にまとわりつく軟体物の感触に、つい熱がこもった吐息を漏らしてしまう。
引っ張られた兵士が少し前につんのめるくらいだ。それでも必死に逃げようと手足をバタつかせて抵抗を続ける少女に、容赦なく縄が身体に投げつけられる。
「卑怯ですわよ！　正々堂々とかかってきなさいッ!!」
どんなにシャーロッテが叫んでも、少女の身体は縄で締め上げられていく。特に重力に逆らって突き出した乳房には根元から絞るように巻きつき、肋骨に沿うように腹部をレオタードの上から締め上げる。腕も脚も束縛され、完全に身体の自由が利かなくなってしまう。
「よし、いいぞ！」

『第四章　公開輪姦』より

「ここ、こんなに濡れてるじゃん」
露出させられた処女の肉ビラは蜜でビショ濡れになり、魔法の刺青の浮かび上がった恥丘に生える薄めの陰毛まで湿っている。まだ蕾のような花弁の中心にある淫核は、包皮がむけ上がるほどに勃起しむき出しになっていた。
「そ、そこは……触っては、ひぁンっ！」
男根に奉仕しているうちに興奮してしまっていたことは、もはや言い訳できない。その証拠である愛液はどんどんと溢れてきて、太股を伝い地面へと流れ落ちる。
「み、見てはダメですわッ……」
熱く潤んだ女陰が外気に触れて、ひやりと冷たく感じる。羞恥のあまりにシャーロッテの身体は大きく波打った。視線から逃れようとするその声は上ずっていて、逆に男に媚びているかのように聞こえる。
「おい、さっさと代われよ後がつかえてるんだぞ」
怪盗少女に群がる男達に別の男が急かした。
「待て待て、そう慌てるなって。じゃあそろそろ本番といくか」
乳房を弄っていた男がその場に仰向けになり、限界まで勃起した逸物を晒した。
「ほら、跨がるんだよ」
肉棒の香りと味のせいで興奮した身体は、牡の要求を拒むことができなかった。奉仕は

一回中断され男達に抱えられ、いきり勃つ肉杭を跨ぐ位置に移動させられる。肩を押さえつけられて逃げることも、抵抗する暇もなく着乱れたレオタードの股間から露わになっている女陰に直接熱い亀頭が触れた。

「ひぃンっ！　あ、熱い……」

先汁で濡れる亀頭がアヌスを探り当て、放射状に並んだシワを押し広げ始める。

「あッ、い、いやッ！　は、入ってきますわッ!!」

排泄器官を犯されようとしているのに身体は恐怖を感じるよりも、一度味わったあの肛門絶頂の快楽を期待して疼いた。

「うひひ……それじゃ、いくぞっ！」

薄布に包まれた尻肉を男が両手で固定し、一気に背面座位の体勢から腰を突き上げてきた。

「ンはぁああぁっぁぁぁぁ――――ッ！　い、いきなりは、ひぐぅぅぅぅぅッ!!」

先汁を垂らした肉槍が愛蜜で濡れた肛門の粘膜に触れ、窄まりを四方に押しやりながら腸内にねじ込まれる。太いペニスで直腸を拡張され、シャーロッテは圧迫感のあまりに口をパクつかせながら天を仰ぐ。バサッと長い金髪が揺れて、黒いブーツに包まれた太股がピクピクと小刻みに震えていた。またあの身体に杭を打ち込まれたかのような衝撃に全身がわななく。少女の言葉にならない悲鳴は、男達の興奮をさらにかき立てる魅力の一つで

しかなかった。
「おぉッ、ズッポリ尻穴にはまってやがる！」
「いきなり根元まで咥え込むなんて、すげえな」
男達の声に耳を貸している余裕などなく、少女は痙攣した足を踏ん張り何とか上体を支え、倒れないようにするだけで精一杯だった。
「くっ、アナルのくせに柔らけぇ～」
肉勃起を根元までねじ込み、平らな直腸粘膜が絡みついてくる感触に男は堪らず歓喜の叫びを上げる。
「か、はっ……す、すごい……苦しいのに……」
カリ高の亀頭がゴリゴリと押し進んでいった腸管は、摩擦熱で火傷するかと思うくらい火照っていた。凄まじい圧迫感から逃れようにも、体重のせいで自然に腰は下に沈みアヌスは深々と貫かれる。金髪の巻き髪を振り乱しながら、シャーロッテは快感と呼ぶにはあまりに暴力的な感覚に喘ぐしかなかった。
「これは罰なんだから一人で楽しんでちゃダメでしょ」
だらしなく半開きになっている口に、再びペニスをねじ込まれる。もう少女に抵抗する気力もなく、口内に侵入してきた牡棒を唾液で濡れた舌で迎え入れるしかなかった。
「あ、ズルイぞ！　それなら俺はこのデケー乳を使うかな」

「んだよ、それじゃあ手しか残ってないじゃん」
股間を硬くしている他の男達も我先にとシャーロッテの肉感的な身体に群がる。
「ンちゅ、ちゅぱ……ちゅ、くちゅンふ、こ、こんな……酷すぎます、わ、ンぅッ！」
両手には再びそれぞれ肉棒を握らされて扱かされる。そして二つの乳房の間にできた深い肉の谷間にまでペニスが挿し込まれ、汗の滲む乳肌に我慢汁を擦りつけられた。口内の粘膜に染み込んでくる生臭い味が媚薬のように理性を蕩けさせ、牝の欲望をむき出しにさせられる。うっとりと頬を染め奉仕を続けるシャーロッテの姿に、男達は興奮気味に声を弾ませた。
「さすがにこんだけの爆乳だと、パイズリも格別だぜ」
「手コキじゃ物足りないから、俺にもおっぱいを揉ませろ」
完全に性感帯として開発された乳房に無数の手が伸び、揉んだり撫でたりと好き放題に弄り始める。男達に負けないくらい立派に勃起した乳首を指先で転がされ、びりびりと電流に似た痺れが乳房全体に広がった。敏感になった乳肌を愛撫され、その甘い乳悦は少女の興奮を加速させる。
（ダ、ダメですわ……胸を弄られたら、気持ちよくてッ……）
もう何も考えられない。肉棒と指や手のひらによる乳責めに悶えながら、夢中になって男根にしゃぶりつき手で扱いて奉仕する。唾液や汗、様々な体液が絡み合い辺りには淫ら

な水音が響き、濃厚な性臭が漂う。
「気分出てきたじゃねーか。それなら俺も動くぞっ」
下にいる男が一度腰を沈ませ、再び腰を突き上げ腸壁を肉勃起で抉った。
「ンはぁぁぁッ！　んぐっ、ンッ、はぁ、ンあぁぁっ!!」
華奢な少女の身体が大きく上下にバウンドし、思わず口からペニスを吐き出してしまっていた。金色の縦ロールが激しく揺れ、重量感たっぷりの乳肉が魅惑的に弾む。
ガクガクと身体を震わせながら肩で息をしているシャーロッテを、容赦のないアナル責めが続けられる。尻肉を掴まれて突き上げられては引き戻され、直腸粘膜が肉棒の高速ピストンで擦り上げられ脳を揺さぶられた。
「はぁンっ、ダ、ダメっ……激しッ、すぎですわッ!!」
弾む尻たぶは男の股間とぶつかり合い、一定のリズムで乾いた音を刻む。突然の責めだったにもかかわらず、少女の身体は濁流のように流し込まれる肛悦をもっと貪ろうと自然に腰が動き始める。
（ど、どうして勝手に腰が動いてしまいますのッ……）
大勢の観衆の目の前でこんな痴態を晒しているというのに、羞恥よりも快楽に溺れることを身体は望んでいた。熱くたぎった肉棒で狭い腸壁を押し広げられ、カリ裏で粘膜を削られる。

腰が跳ねる度に少女の額から汗の雫が飛び散り、全身の神経をアナルに占領され他のペニスに構っていられないくらいだった。

「何一人でよがってんだよ、ちゃんと舐めろ」

不満げに男が口元にペニスを近づけるが、身体が激しく上下するせいで上手く咥えることができない。両手の男根も強く握り締めるのが精一杯で、とても扱いたりできる状態ではなかった。

「ちっ、仕方ねえなぁ」

そう呟いた男に無理やり口の中に肉棒をねじ込まれ、亀頭が扁桃の辺りまで達し喉に直接我慢汁を流し込まれる。激しい嘔吐感が込み上げてくるが、なぜか喉の渇きが満たされたような満足感を感じてしまう。

「こっちも好きにさせてもらうぜ」

パイズリをしていた男も揺れ踊る爆乳を捕まえ、左右から押しつぶすように真ん中に寄せる。そして汗ばむ胸の谷間に肉棒を突き入れ、乳肉をグニグニと擦り合いながら腰を揺すった。感度が限界まで高まった乳肌を乱暴に刺激され、背筋が肉悦で痺れ脳に正確に情報が伝わらない。

（こんな……こんな、酷すぎますわッ……）

男達はシャーロッテに奉仕をさせるというよりも、自分で好き勝手に少女の身体を貪り

始めた。まるで道具のように扱われているのに、抵抗することもできず暴力的な欲望を受け止め続ける。

「うっ！　そんなに尻を締めるなってッ、出ちまうだろっ」

下になっている男が歯を食いしばりながら腰を上下に揺らした。腸内のペニスがさらに膨らみ、ビクビクと血管が震え始めたのが粘膜を通じて伝わってくる。直腸はさらに拡張されて括約筋が軋み、鋭い痛みで肉満になったアヌスが悲鳴を上げた。風邪に魘(うな)されているかのように肛門を中心に全身が火照っているが、腸壁で感じる男根はそれ以上に熱い。我慢汁の分泌が増え腸液と混ざり合った粘液が潤滑油となり、肉勃起のピストンは滑らかになり速度を増していく。

「口の方もいい感じだぜ。たっぷりと濃いミルクを飲ませてやるよ」

何度も何度も激しく肉棒が口内を突き上げ、擦られた舌がヒリヒリと麻痺する。唇の端からはじゅぷじゅぷと泡立った唾液が零れて、顎を伝い透明な糸を引きながら跳ね踊る乳房に滴り落ちた。

（あ、頭がおかしくなってしまいそうですわッ！）

あれほど生臭い香りに包まれていたはずなのに、強烈な淫臭に鼻は麻痺したのか気にもならなくなっていた。それどころか牡の欲情を全身に浴び、少女の性欲まで異常にかき立てられる。

「俺も、もうイっちまいそうだ！」
「こっちももっと扱けよっ」
少女の身体に群がる男達は腰をガクガクと震わせながら、限界寸前の肉棒を擦りつける。先汁を大量に吐き出しているペニスが触れている場所は、肌が燃えるように熱を帯びていた。力任せに口内に太く長大な男根をねじ込まれ、まるで脳をかき回されているような感覚に陥る。
（お、お尻が熱いッ！　このままじゃ気が狂ってしまいますわっ!!）
息苦しさで視界が霞む。もう何が何だか分からず本能のままに、肉棒を舐め上げながら吸い、十本の指で握り夢中で扱く。腰が勝手に動き出し、上質な布地がぴったりと張りついた尻肉を男の股間に叩きつけるように振りまくった。
「ぐおぉぉっ！　出るッ、イクぞ!!」
「このエロ乳にたっぷり出すからなっ！」
「おらっ、仮面にぶっかけてやる！」
極上の身体を堪能していたところに、シャーロッテの積極的な奉仕が加わり男達は堪らず呻き声を上げる。喉奥が苦い我慢汁で痺れ、身体の外から内から肉棒がサイズを増したのを感じた。
「ンちゅっ、ンンぅぅぅっ！　ダメッ、はひぃいいぃぃ――――ッ!!」

絶頂寸前の怪盗少女にトドメの一撃がアヌスを貫き、目の前が白く弾ける。その瞬間に男達の雄たけびとシャーロッテの嬌声がシンクロした。

ドビュッ、ビュブュビュル！　ドピュドピュブビュゥゥゥ――――ッ!!

瞬く間に口内と腸管が白濁液で満たされ、唇とペニスの隙間から溢れてくる。流し込まれた熱い粘液のせいで直腸粘膜は火傷しそうなほど熱くなっていた。

「うはっ！　止まらねぇ～ッ！」

全身に突きつけられた男根から凄まじい勢いで白濁液が飛び散る。汗を吸ってさらに身体にキツくまとわりつく黒のレオタードに淫らな模様が付着し、ドロリとした粘液の絡みつく仮面はその重さでずれ落ちそうになる。胸の間から噴水のように吐き出された粘液は首筋に襲い掛かり、乳房を黄ばんだ白で汚していく。両手に握っていたペニスはシャーロッテの顔を狙って射精を繰り返すが、勢いが強すぎて金髪の縦ロールにまで達して太い糸を引く。

「……ンうっ、うンンぅ……ゴクっ、ンくっ……」

快楽の波が津波のように押し寄せ、アクメに達した余韻で呆然とする少女は恍惚とした表情を浮かべていた。汗ばんだ肌に精液はやけに馴染み、火照った身体をさらに熱くする。黒い衣装には牡の体液を塗り込まれ、ヌルヌルとした温かな感触が直に肌へと伝わってきた。

（精液が……いっぱい、ですわ……）
無意識のうちに喉を鳴らしながら口内に溜まった精子を飲み込み胃を満たした。頭は正常に働かず思考は停止したままで、焦点の定まらない視線がふわふわと宙を見つめている。
周りで見ていた男達も自分でペニスを扱き、射精しそうになると半裸状態の少女に近づきスペルマをぶちまけていく。白化粧を施された爆乳にかける者が多かったが、太陽のように金色に輝く長い巻き髪は白辱の対象として人気だった。
「ベトベト……ですわね……」
おかげで頭から牛乳でもかぶったかのように、金髪は白と対比が淫らでとても扇情的だった。王女としてのプライドも人間としての尊厳も粉々に打ち砕かれ、放心状態のシャーロッテとは反対に男達の興奮はさらに高まる。
「おい、終わったなら交代しろ」
「俺にもやらせろって！」
堰を切って流れ込んできた肉悦に抗うことはできず、精神まで快楽に染まり始めていた。少女を取り囲む男の数はさらに増え、当分この陵辱は終わりそうにない。
（わた、くし……もう……）
シャーロッテは白濁まみれになった身体を見下ろした。こんな状況で悔しさも湧いてこない自分の変貌ぶりに、自嘲気味に笑うしかできなかった。

『第五章　淫縛の円舞曲』より

キスを中断されてジェイクスが声を荒げた。それでも少女の細い身体を離そうとはせず、柔らかな唇の感触を思い出して舌なめずりをしている。

「城内でこんなことをするなんて……恥を知りなさい!!」

顔を真っ赤にしながらシャーロッテは叫ぶ。とにかく人目に触れてしまうのではないかと、少女は気が気ではなかった。

「どうやら自分の立場というものを理解しておらんようだな。こっちに来いっ」

ジェイクスは廊下の突き当たりの陰へと嫌がる少女を無理やりに引きずっていく。

「な、何をしようと……んぐっ!?　ちゅ、ぢゅうっ……」

必死に逃げようとする少女の口は再び男の唇に塞がれる。そして今度は生温かくナマコのような舌が侵入してきて、口内をじゅるじゅると舐め回された。すぐにシャーロッテの舌も搦め捕られ、唾液ごと淫らな水音を立てながら吸い上げられる。

（い、いやッ!!　こんな屈辱……ですのに……）

男としても人間としても最低だと思っていたジェイクスと粘膜を絡めあっているというのに、嫌悪感を感じるどころか全身は甘く痺れ力が一瞬にして抜けていく。相手を押しのけようと突っ張っていた両腕はダランと垂れ、ツンと吊り上がっていた目尻がだんだんと下がってくる。強気なイメージの蒼眼は焦点がぼやけてとろんと蕩けていた。

「いいぞ、エロい顔になってきたわい」

うっとりとした表情を浮かべる王女の姿に気分をよくした大臣は、唾液を流し込みながら豊満な乳房を力任せに揉み上げる。
「んふっ、ンン……そ、そんなに強く揉まふぁいふぇ、ンうっ……」
美しい乳肉が変形するほど乱暴に揉みしだかれ、強制的な肉悦に身体は反応し興奮が高まってくる。もはやジェイクスとのキスを拒むこともできず、されるがままに口内を愛撫され続け官能を引きずり出されていた。
「ン～、胸か？　おっぱいを揉まれて感じておるのか？」
強く揉みつぶしたりという激しい愛撫から、優しく撫でるだけと強弱の変化をつけられ少女の理性は乳悦に翻弄される。太い手がさわさわと腰の辺りから尻へと降りていき、スカートを捲り上げて形のよいヒップを露出させた。ピクリと臀部の筋肉が震え、桃尻に二つの窪みができる。
「んンっ、そ、そんなことありません、わっ……」
言葉では何とか否定したが少女の声色は確実に熱を帯び、雪のような肌理細かい肌が汗ばみ前髪が額に張りついている。スカートの下から姿を現したタイツに包まれ、ムッチリと艶かしいラインを描いている太股が男の欲情をさらにかき立てた。
「うっとりと頬を染めておいて何を言っておる。その表情堪らんわい」
鼻息を荒くしていた中年男は片手で少女の腰を抱き、その首筋に舌を這わせながら器用

に反対の手でズボンを脱ぎ股間を露出させる。
「ちょ、ちょっとやめなさい！　早く服を着なさいってば!!」
ここは廊下の隅で人目に付きにくいとはいえ、いつ侍女や兵士達が通りかかるか分からない場所である。それなのにジェイクスは肉棒をビンビンにいきり勃たせ、弓のように反り返る砲身を見せ付けるように揺らした。
「ほれほれ、秘密をばらされたくなかったら早くしゃぶってくれ」
大臣は腰を突き出して王女の純白のドレスに透明な粘液を塗りつけながら、奉仕を催促する。布越しに伝わってくる亀頭の硬い感触と熱が太股をなぞり、強烈な牡臭が鼻先まで漂ってきた。
「そ、そんな無理ですわ……」
男根を見た瞬間に恥ずかしさで顔がドッと熱くなっているのに、ビクビクと震える肉勃起から視線を外すことができない。それどころか何度も何度も咥えさせられてきたせいで、嫌でもペニスの味が脳裏に浮かんでくる。口内には生唾が後から後から込み上げてきて、飲み込む度に喉がゴクンと鳴った。
「早くしないと人が来てしまうぞ？　シャーロッテ姫に咥えさせているのを自慢できるから、ワシはそれでもいいがのう」
ニタニタと笑う大臣は要求を引き下げるつもりは毛頭ないらしい。

「うぅ……仕方、ありませんわ……」
黒猫の正体を知られた時点でシャーロッテに拒否権は存在しなかった。それならジェイクスを早く満足させて、この場を乗りきるしかない。少女は抵抗を諦めて、辺りを気にしながらしゃがみ込んだ。
「ククク……そうそう、たっぷりおしゃぶりすんるんだ」
唇に亀頭が擦りつけられ、透明な先汁が口元を汚した。生臭い牡の香りが鼻孔を擽り脳を麻痺させる。臭いに反応して身体は肉悦を思い出して疼き始め、切なさを堪えきれなかった。
（は、早く終わらせなければ人が来てしまいますもの……）
口を半開きにして赤黒いテカテカの亀頭を迎え入れる。膝立ちになり上体を前に倒しながらゆっくりと肉棒を呑み込んでいくと、喉の渇きはさらに強まり無意識のうちに舌を肉幹に巻きつけていた。
「うっははは、あの高飛車なシャーロッテ姫がワシのチンポを咥えておるわい！」
ジェイクスにフェラをするのは初めてではないが、あの時は怪盗少女としてで正体は知られていなかった。それに比べ今は王女である自分が臣下に、しかも大嫌いな男の逸物を舐めしゃぶっているのだ。だから屈辱感はあの時よりも何倍も強い。それなのに口内の粘膜が肉棒で満たされ扁桃を亀頭で突かれる感触は、苦しいはずなのに妙に心地よかった。

「はむ、んふっ……し、静かにしなふぁひ……んちゅっ、むぅ……」
口の中に溜まった唾液が唇の端から溢れ、吐き出された肉棒は唾液が淫らに塗り上げられている。亀頭の小孔から溢れた苦味の強い粘液が舌や喉奥に絡まり、きつい臭いに少女の本能は発情へと導かれていった。
「いいぞいいぞ、その調子で舐めろ、もっと舌を使うんじゃ」
少女は言われるがままに唇と舌で肉棒を扱きながら、口を窄めて怒張を吸い上げる。大きく張ったカリが口内を擦り、首を前後に揺らすごとに金髪が波打った。深くまでペニスを呑み込むと頬や鼻先にチクチクと硬い陰毛が触れるが、それもさほど気にはならない。
（こんなもの、舐めてるのに……）
浮浪者の恥垢だらけの不浄極まりないペニスに比べれば、今口にしている中年男の男根は好感すら抱いてしまう。そう思うと急に頭の中が肉棒のことでいっぱいになり、理性はあっと言う間に蕩かされていく。
「どうじゃ？　ワシの摩羅は美味いか？」
興奮気味のジェイクスが声を弾ませながら見下ろしてきた。少女はその視線を避けて目の前の男根を必死にしゃぶり続ける。そのセリフを口にしては、自分の中で湧き上がる感情を抑えつけることができなくなりそうだった。
そんな少女の心境を見透かしているのか、男は不敵な笑みを浮かべる。

「美味いと言わんと、人を呼ぶぞ？」
どこまで卑怯で卑劣な男なのだと、蒼眼で睨みつけても状況は変わらない。結局大臣の要求には従うしかなかった。
「お、おいひぃ、ですわ……」
男根を頬張ったまま口をモゴつかせながら屈辱の言葉を吐き出し、早く終わって欲しいと心の中で何度も繰り返した。そしてジュプジュプと淫質な水音が漏れることにも気を留めず必死に舌を動かしていく。
「何がおいしいのかちゃんと言わんと分からんぞ？　それにおいしいならもっと嬉しそうな顔をせんか」
少女が逆らえないのを分かっていて、さらに男の命令は屈辱的なものへと加速している。一瞬だけ奉仕の動きが止まる。しかしシャーロッテは顔の筋肉を引き攣らせながらも笑顔を浮かべ、憎き相手を見つめた。
「ペ、ペニスが……」
「ペニスじゃなくて、ジェイクス様のぶっとくて立派なおチンポじゃろ？」
肉棒から口を離してキュッと唇を結ぶが、無駄な抵抗だった。悔しさで少女は瞳を潤ませながら無理やり微笑み、恥辱の言葉を吐き出す。
「ジェイクス様の、ご立派な……おチンポが、おいしいですわ……」

搾り出すように震える声が途切れ途切れになりながらも、何とかセリフを紡いだ。しかし少女の中で何かが音を立てて崩れ去った瞬間でもあった。身体はどんなに汚されても、凛とした王女としてのプライドだけは失うことはないと信じていた。

しかし白いドレスを身に纏い豪華な装飾品で着飾っても、娼婦のように淫らに男根をしゃぶりそれを悦ぶような言葉を口にしている。一国の姫君とは到底思えないような行為にもかかわらず、身体は慣れてきて快感まで覚え始めていた。

「グハハハ……そんなに美味いならもっと食べさせてやろう」

侍女達が綺麗にセットしてくれた少女のトレードマークでもある縦ロールの髪を両手で掴み、グッと引き寄せた。

「んぐっ！　ちゅ、むぐぅッ……ンちゅぅ、ちゅぶ……」

虚をつかれ少女の喉奥に深々と肉棒が突き刺さり、大臣は気持ちよさそうに腰を前後に振り出した。唾液を乱暴にかき混ぜ音を立てながら、口を一方的に犯される。幹のゴツゴツとした感触が肉悦をもたらし、息苦しさで思考が遮断された。少女の呼吸のことなどお構いなく続けられるピストンに、唇と肉幹の隙間からくぐもった吐息が漏れる。

「ンッ、んんっ！　んぅぅ――――っ!?」

それでも口は自然と男の腰振りに合わせて動き、ペニスを舌で舐め上げ喉深くへと咥え込む。何十人という町人を相手した時に、イマラチオの要領を嫌でも身体に覚え込まされ

ていたのだ。
「おおっ、自分から吸い付いてくるとは！」
生意気で高飛車な王女。絶対に手の届かない高嶺の花であるシャーロッテの可憐な唇を、自らの醜い男根で貫き犯している。その嗜虐的な悦びと興奮で悪大臣は声を弾ませながら腰の動きを早めた。
（く、苦しいはずですのに……頭がボーっとしてッ……）
濡れた唇から肉棒が抜き出される度に、我慢汁と唾液の混ざり合った透明液が口の端から零れる。顎を伝う唾液は純白のドレスから大胆に晒された上乳に滴り落ち、首振りのリズムに合わせて爆乳は扇情的な揺れ踊りを見せた。
「ふぐっ、ンうっ……こ、こんな、頭が変になってしふぁ、ぢゅ……ひますわぁ……」
ドレスの胸元の下では肉棒舐めの快感に反応して乳輪は膨らみ、乳首が硬く尖りブラの裏布と擦れ合い敏感になった先端が痺れる。そしてスカートの奥では女陰から蜜が溢れショーツを湿らせ内股まで濡らし、異常な熱気がこもり股間は蒸れ蒸れになっていた。
どんなに頭で拒み続けても、牡を求める牝の本能に逆らうことはできない。そして弱みを握られているという立場が官能への誘いを正当化し理性を狂わせ、もはや正常に思考が働かなくなっていた。
（ほ、欲し、くないですわッ……欲しく、欲し、あぁ……）

肉悦に目覚めた身体は口内で脈動する男根の味に、自分ではどうすることもできないほどに興奮が膨れ上がる。もうこのままでは収まりはつきそうになかった。グッショリと濡れた下着の中が疼き、子宮が切なさで締め付けられ苦しい。

どんなに熱心にペニスにむしゃぶりつき、喉の奥まで咥え込んでも生臭い臭いを吸い込み苦い我慢汁を啜っても足りない。牝肉の渇きが満たされることはなかった。

「ぬう、いかんッ、出る！」

無意識のうちに男根を夢中になって舐め上げていると、不意に舌先から熱い硬棒の感触が消えた。ジェイクスは王女のフェラ奉仕の心地よさに耐えられず射精しそうになり、思わず腰を引いたのだ。

「あぁ……」

すると口からは惜しむような溜め息が漏れる。ハッと我に返り手で半開きになった口を押さえ、伸びていた舌ごと喘ぎ声を飲み込んだ。

「グフフ……熱心にしゃぶってくれるのはいいが、もう我慢できんわい」

いつの間にかジェイクスの方も呼吸を乱し、興奮で息を弾ませている。少女の唾液をたっぷりと浴びた肉勃起は限界までいきり勃ち、幾筋もの血管を表面に浮かび上がらせていた。

「はぁ、はぁ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/